

懐かしいキューバが変わっていく！？

“カリブの赤い星”キューバと米国の上に劇的な変化が起ころうとしています。1959年の革命の直後から外交関係が断絶されていた両国が、国交正常化のための準備を始めたのです。中東を初め不安定な政情が続いている地球上の一隅で、なにか平和への期待が膨らんでいくような気もしてきます。

それはかつて聖教新聞の特派員として何回かキューバを訪れた感慨からくるものかもしれません。キューバに対して厳しい目を向けている政治家や知識人も少なくないことは承知しています。でも、入国すること自体が難しかった時代に、現場に足を踏み入れ、市民とじかに接した体験は、それなりに説得力があると思っています。



話はもう20年から30年前のことですが、ラテン・アメリカでは日本と比べ時の進行が遅いのです。話はほぼ現在にも通ずるとらえていただいても大丈夫でしょう。そこでこの機会に当時まとめたリポートを思い出しながら抜粋を紹介します。(諸種の事情から当時、新聞への記事の掲載は難しい状況にありました。リポート全文をご覧になりたい方は、**ハバナのモロ要塞前で** このホームページの「ラテン・アメリカからのメッセージ」欄の「かいま見たキューバ事情」にアクセスなさってみてください)

変化の激しい現代史の流れの中で、キューバは今なおカストロ政権が続いています(2008年、フィデル・カストロから弟のラウル・カストロに国家評議会議長が移譲された)。革命から55年。これほど一人の政治家(革命家または軍人とも言えようか)が長期にわたって一国をリードしているケースは極めて珍しいでしょう。それを「独裁政権」という人もいます。でも北朝鮮の“将軍様”と違って、私の見知った限りでは、フィデル(カストロが姓、フィデルが名前で親しみを込めた呼び方になる)は今なお国民に人気があります。政治の処方の問題はあるとしても、少なくとも“民衆のため”という革命時の理想は今なお消えてはいない。そして社会体制も一部に資本主義経済の要素を取り入れることはあっても、根本的な転換はまだずっと先のことでしょう。

32年前、私が初めてキューバを訪れたときは、入国ビザを取得するのに複雑な手続きが必要でした。国の経済も貧しかった。でも治安は中南米でも最もよかったです。夜中でも街中を平気で歩くことができました。他の国では考えられないことだったからです。それは貧しいけれどもなんとか食べていける、働き口は国が作ってくれるという社会。国は教育や医療に重点をおき、15歳以上の国民の識字率は99%で中南米では最高水準、医師は人口1万人に670人と世界で最も多い国に属しているということが犯罪に手を染める人間を少なくしていたのかもしれない。

この間のうれしい変化の一つは、その社会主義の国に仏教徒が誕生し社会貢献の活動をしていることです。

その一粒種とも言えるメンバーを首都ハバナを訪ね懇談しました。社会主義国キューバの一市民であるC氏は、国外に住む友人のキューバ人から仏法について聞いたという。その後、手紙



未来を担う女子高校生たち

によるやりとり、またN氏のキューバ訪問等により次第に関心を深め唱題を始め御本尊を受持す

ることができた、というものでした。仏教徒として信心を始めたC氏が、病気の克服、家庭不和の解決と、社会体制の異なる土壌にもかかわらず、あふれるような功德に浴している姿は、何ものにもかえがたく嬉しいものでした。仮に政治で“物の平等”は実現できても、人間一人一人が持つ宿命は解決できない。ここに唯物主義と唯心主義を止揚し、人間の生命次元の平等を実現する「色心不二」の仏法が必要になってくると思うのです。“カリブの赤い星”の国で同志とともに御本尊に向かっての唱題——なんともいえぬ感動が胸奥より込み上げてきたものです。

キューバで進行中の社会主義革命という実験の成否は、いずれ歴史が判定するにしても、バチスタ独裁政権時代の一般民衆の生活の悲惨さから見れば、比較にならないほど改善されていることは事実でしょう。



ハバナ滞在中に利用したタクシーが5台。その運転手ごとにも、各種の質問をぶつけてみましたが、みるところ、現体制支持派が4人、反対派が1人でした。官僚性と人々の勤労意欲の欠如を指摘したキューバ人もいた。工場の生産性の低さ、経済の停滞、また、なかなか向上しない生活レベルの低さを指摘する声もありました。複雑な国際政治上の問題や背景、その方向性もすべては掌握しがたい。また、国の体制が良いか悪いかの結論も簡単には出ない。にもかかわらず、私はこのカリブの島に足を踏み入れたことによって、今までの倍にも増してキューバに親しみを抱くようになったのです。それは、一般市民のゆったりした笑顔からか、治安のよさからくる安堵感からか、あるいはまた、妙法の一粒種C氏との対面からか……。タクシーの確保、ホテルの移動などでかなりの難儀があったにもかかわらず、“私のハバナ”は、心のフィルムに鮮明な印象を焼き付けた。それは単なる“旅情”といった感傷を越えたものでした。

そして、1996年には池田SGI会長が同国を訪問しカストロ議長とも懇談しました。懇談の内容の奥は知る由もありませんが、大きな注目と話題になったことは議長が背広とネクタイ姿でSGI会長を迎えたということです。「平和の指導者をお迎えするのですから……」と。革命以来、公式な場では初めてとのことでした。それほどに世界の平和について語ろうとする対談相手に重きを置いていたのでしょう。

あれからまもなく20年。現在、社会主義国のキューバでも創価学会が正式に宗教法人として登録され、仏教徒メンバーが自身の人間革命と社会貢献の活動に励んでいます。アメリカとの国交正常化はまた一つキューバの国の発展と市民の生活向上につながっていくのではないかと——そんな希望と期待をもたらしてくれるニュースへの感想です。



落ち着いた地味な感じのハバナの海岸